
空から落ちた紅き月

Gペン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空から落ちた紅き月

【Nコード】

N3595F

【作者名】

Gペン

【あらすじ】

幼き頃から魔術に触れてきたキースはある戦争に巻き込まれ、レフィカという少女を追っ手から庇うべく自らの意志で『聖石』の不可侵たる部分に干渉してしまうが……。

序話・月明かり照る少年（前書き）

どうも読みに来ていただきありがとうございます！

この小説はシリアス&コミカルな風潮を含む異世界ファンタジーです。

どうぞご気楽に読んでやってください。お願いします。

序話：月明かり照る少年

人々が当たり前の事として捉え過ぎす『平和』——、即ち日常は存外、日常から生まれた多少の歪によっていとも容易く崩れ去っていくものであり、そして感じられなくなって初めて感じられる——、淡く儚いものなのであった。

そんな日常の一部を象る太陽はいつも同じように日の始まりを告げ、そして終わりを告げる。それは誰もが普遍的事象として捉え、当たり前のように理解認識し過ぎす。しかし、必ず訪れるであろう明日の事などは、誰も分かり得るはずもない。増してや明日、自分の身に降り注ぐ運命などは知る由もなかったのである——。無論、それは明日をひたすら望む少年であってもそれは同じ事なのであった。

・・*・*・*

「早く逃げるんだっ、森へっ。西の森へ逃げるんだっ」
「わかつてる！　くそっ、なんで俺たちがこんな目につ……」

女、子供関わらず体中の至る所に怪我を負った人々は自らの傷を省みることなく、歩けない者を背負い、もしくは抱いて轟音と共に戦火灯る町の中をひたすら駆け抜けて行った。

以前、静かに佇んでいた古い家々は放たれた火によって跡形もなく炎上している。敵国の武装した兵士から逃げるその住民たちの影が燃え上がる炎によってゆらゆらと干変していた。

怒号、悲鳴、泣き声——。そんな非日常の事を当たり前にしてしまふ『戦争』がこの町にも降りかかったのである。

しかしこの悲惨な状況を打開する事は極めて困難なのであった。
というのも大陸随一の領土を保有する大国——ザフィール帝国が
さらなる領土拡大のために大陸南下政策を実行し、大陸の南東に位
置していた小国、マイアール王国を蟻を踏みつぶすかのようにたっ
た一日で制圧してしまったのである。

もともとマイアール王国は他の大国に劣らないほどの戦力を備え
ていたのだが、それは戦術によるもの。質のいい指揮官を国が育て
上げ他国と渡り合っていたのだがやはり、大陸随一だけあってザフ
ィール帝国に戦術を用いて抵抗することは疎か、兵の量で押し切ら
れてしまい制圧されてしまったのだ。

からしてマイアールの残兵はもう殆どいない。国王据える城内に
は一歩たりとも入れないと半ば自棄を起こし、城の門に数十人の衛
兵が固まっているがそれもいずれ突破されるだろう。いや、今すぐ
にでも。

「お母様……。お父様……。」

炎移りゆく家々から少々離れた物陰に少年と少女が二人。息を殺
して夜の闇に溶け込むよう身を隠していた。

「おいっ！ そんなに身を乗り出したら見つかったまうぞっ。ほら
っもっところちに」

少年は事もあるつか物陰から身を乗り出し、不安げな面持ちで少
し先に位置する城門を見やる少女の裾を引っ張り、無理やり元の位
置に戻させた。

その数秒後に身を隠している所の近くで武装を施した兵士の怒鳴

り声がしたので、少年はホッと一安心。大きな溜息をついた。

「気持はわかる。でも俺はお前の父さんに頼まれたからな……、約束は破りたくない」

少年はぐつと堪えるように拳を握り、足元に視線を落とす。少女は少年の物言いに多少なりとも納得がいったのか、コクンと僅かに頷く。しかし、やはり気になるようでちらちらと視線を城門の方へやっていた。

「いい父ちゃんだなお前の……、それと母さんも。皆お前を心配していた……。自分の命なんてこれっぽっちも気にしてない風に……、だから俺はお前を」

「わかってるっ！」

突如として少女が少年の言葉を遮る。少年はやや驚いた面持ちで悔しさを滲ませた少女の顔を見やったが「そうだな」呟き再び足元へと視線を落とした。

「わかってるってば……」

少女は少年の横に力無くどさつと座り込み、膝を抱え頭をそこに埋める。全部夢だったらしいのに……、少女は本気でそう思う。もしこれが夢となってくれるなら自らの命を代償として捧げてもいいと、そこまで思っていた。

「……」

少年は座り込んだ少女を見て複雑な表情をする。何度か少女の元を手を伸ばし慰めようとしたが結局引っ込めてしまった。どう慰めて

あげればいいのか分からなかったのである。

「お父さん……、お母さん」

噤り泣きながらぼつりぼつりと呟く少女の声が轟音轟めく中、少年の耳に嫌というほど聞こえてきていた。

（どうすれば……）

少年は自らも膝を抱えて座り込み頭を抱えた。しかし、

「……!?!」

「きゃあっ!」

まだ燃やし足り無かったのか、ザイマールの兵士が少年たちの身を隠しているところ目掛けて炎を投げやったのである。

当然、少年の思案はそれによって打ち切られ心の中で舌打ちをする。取り合えず先ほどの衝撃でつんのめった体を立て直し、中腰になって再び身を隠した。

（一か所に留まりすぎたか……、これじゃすぐに見つかっちゃう）

自らの袖を細く震える手で掴む少女に「大丈夫だから」不安滲んだ少女の瞳を真っ直ぐに捉え、はっきりと言った。

「おいっ！ あそこに餓鬼がいるぞっ。男と女ですかあゝ。愛の逃避行ですかい？ そりやお断りだあ」

はっとなって声の方向に向き返ると武装を施した男たちが四、五人。ベツタリと血の付いた剣をチラつかせ、卑猥な笑みを浮かべな

がらこちらに近づいてきていた。

「くっ……」

気付いて辺りを伺えば身を隠していた所も半壊気味で身を隠すにはもうもたないところまでできていた。ぐらり、と背中を寄せていた壁が軋む。

「ちっこいけど仕方ねーよな。命令だし」

何が面白いのか、品の欠片も無い笑みを零しながら男たちは少女の元へ一歩、そしてまた一歩、と近付いて行った。

「ちっ……」

じわじわと近付いてくる男たちに圧迫されるように少年は顔を苦渋で歪ませ、ぐらぐらと揺れる壁に背を押しつける。

（せめて彼女だけでも……。少しでも、ほんのちよつと時間が稼げれば……）

視野に、にじり寄ってくる男たちを入れながら辺りを伺い、どうか逃げることはできないか、と思索する。

ぐらり、また壁の軋む音がした。

（……！）

少年は今にも泣き出しそうな少女の小さな手をギュッと握りしめる。彼女だけでも助けたい。約束などとは無関係に心からそう思ったのだった。

「キース？」

涙を浮かべた瞳で少女は握られた手を見た後、不思議そうに少年の名を呼ぶ。少年はその手をもう一度強く握りしめ、大きな声で男たちに叫んだ。

「俺は逃げないからなっ！」

同時に後ろの壁に向け、目一杯の力を込めて足を叩きつける。すると、グラグラと揺れていた壁が一瞬ぴたっと動きを止めた。一部始終を見ていた男たちも「自棄でも起こしたか」そう言って訝しげな表情で少年を見やっていた。

すると、一拍置いて少年の背後から木のぶつかり合うような破壊音がする。続けてけたたましい轟音が少年の頭上付近で焦げ臭い匂いと共に聞こえてきた。既に半壊気味だったこの建物は、少年の蹴った事によつて歪んでいた壁から一気に元の形状を保てなくなり崩れてきたのだった。

燃える木の破片は少年の元へと容赦なく一気に降り注ぐ。

「早くっ！ 押しつぶされたらお終いだっ。ちょっとでもいい、時間が稼ぎたいんだっ」

間一髪で落ちてくる木の破片から少女の腕を引っ張って救い、そのまま手を引いて勢いよく駆け始める。

「なんだなんだ？ 今度は逃げんのかい」

男たちは少年らに逃げられてしまったにも関わらず、どこか楽し

げな面持ちで闇を裂くように駆けている少年を眺めている。そして少々間を置いた後、やっとの事で自らの使命を思い出したのか男たちは少年らの後をのろのろと追って行った。

＊・＊・＊・＊・＊

「少しは時間が、はあ……稼げたか」

無心に逃げ込んだ森の中はやはり真っ暗だった。所々木々の隙間から燃える城下町の光景が見えるものの、森を照らしているのはいつもとなんら変わらずに夜空に浮かぶ夜月だけだった。

「……はあはあ。ちよつと疲れたかも」

空を見上げる少年の横には体力の限界がきたのか、呼吸を荒くしてしゃがみ込んでしまった少女がいた。

（これ以上は……やっぱり無理だな）

咳き込んでしまっている少女を見て心の中で現状を把握する。運よく森に隠れたものの、時間が経てば二人とも見つかってしまい殺されてしまうだろう。

少年はもう一度夜空を見上げそう考えた。

「餓鬼っつ、見つけたぜえ」

多少は人数が増えてはいるものの、相手はやはり子供だからだろう。遊び半分に殺しに来たという感じで男たちは少年らと十メートル位の距離でゆったりと足を止める。

少年は予想よりも見つかるのが早かったな、そう思うもうろたえ

たりはしなかった。ただ、男たちがそれぞれ腰に掛けているランタンが今は何故か異様に眩しく見に映った

「俺たちとしちゃゝ殺すのもなんなんでい。その嬢ちゃん見たとこかなりの別嬪さんじゃねえーかい。どうだ……、自分を売ってみないか？ その嬢ちゃん」

少女はビクツと反応して少年の足もとに縋る。それを男たちは面白そうに口を歪め見やっていた。

「聞こえる？ レフィカ」

少年は男たちに聞こえないよう、小さな声で少女の名前を呼び、問いかける。聞こえたのか少女は思いつきり顔をあげ少年の顔を仰ぎ見た。そんなあからさまに反応されては密談が男たちにばれてしまうじゃないか、そう思い少年は場違いな溜息をつくも、どうやら男たちは気付かなかったようで「あっちの少年はどうする」と何やら話しこんでいた。

「返事はしなくていいからよく聞いてくれ……大事なことから」
「……」

少年は、足元に座り込んでいる少女が頷くのを視界の片隅で確認し、あくまで視線は男たちに、そして意識は少女に投げかけ静かに話を続けた。

「ここから西にずっと行つたところに人が二、三人入れる程度の洞窟がある。茂みに隠れていて見つかりにくいかもしれないけど、それは逆に敵にも見つかりにくいって事だ。僕が今から時間を稼いで奴らを引き付けておくからその内に……」

「……駄目よキース。あなた一人じゃきつと殺されちゃうわっ」

ギュツと足を握りしめてくる少女に少年は「大丈夫だから」そう言い、首から下げていたのだろうか、紐のついた紅い宝石のようなものを服の中から取り出し、少女に見せた。

「駄目よそれはっ！ キースっそれは駄目よっ！」

少女はそれを見た途端に大きな声で少年の案を否定する。案の定、男たちにも声が届いてしまったようで「なんだあ？」と近付いてきてしまった。

少年は一瞬どうすべきか迷ったものの、これしか方法はないと判断し、いつの間にか立ち上がったいた少女を突き放して庇うように男たちの前に立ちはだかった。

「痛っ……っ、キースっ！ 駄目よそれはっ。まだ使いこなせてないのに……、のみ込まれちゃうわっ！ 私キースの魔術の力量だっ
て知ってるんだからっ！ お願いだからやめてっキース。……キースまでいなくなっちゃったら私」

どんなに言ったところでキースの意思は変えられないと分かったからだろうか、少女は崩れるようにその場にへたれこみ「お願いだから……」呟きながらすすり泣く。

男たちは「こいつ魔術師なのかつ」そういつて身の危険を感じたのか、一斉に地面に突き刺したままの剣を抜き少年へと向ける。

「大丈夫だっ……。まだ扱い方は分からないけどこの『聖石』——
|、『マナ』なんかに負けないさ。レフィカ」

「お願いだから……、キース。それだけは」

「なんてことないっ！ レフィカはレフィカで自分の立場を考えた

方がいいよ？ 『お姫様』」
「……キース」

何かを掴むように少年に向けられた少女の手は何も掴むことができずに地面へと力無く落ちる。

少年は少女への思いを打ち切るべく視界から少女を消し去った。

(……くそっ！ こんな博打に身を委ねるなんて。レフィカも近くにいるのに……どうする)

少年は少女に対する言動とは別に、心の中で自らを叱咤する。すると、手に握られている紅い宝石——『マナ』が少年の心に反応したかのように光がこぼれ始めた。

「……っ」

手の内にある『マナ』の冷たさを生々しく肌で感じつつ、少年は徐に一步。そしてまた一步と男たちの元へと進んでいった。

すると、見た目十二歳くらいの少年に対し男たちは身の危険を感じたからであろうか。一步二歩と恐れ慄くようにじりじりと後ずさっていく。

が、しかしそれが逆に自らのプライドを傷つけたらしく、男たちは『恐怖』という枷が外れたように大きな声を張り上げ剣を振りかざして少年に襲いかかってきた。

「レフィカ……。ごめんな？」

場違いのように優しい言葉を泣いている少女に背を向けたまま投げかける。そして手に握っていた『マナ』を胸元にもっていき、ポツリ。何か呪文のような短い文句を呟いた。

「早く殺せっ！ こいつはやばいぞっ」

男たちが少年の喉元、首、頭をそれぞれ切り刻もうとした時、眩しい位の光が少年の胸元から発っせられる。

「レフィカ……」

その光は明るい未来を導くような眩い輝きではなく、夜を包む暗闇よりもさらに深い——紅色の闇であった。

「神様……お願いっ！ キースだけでも……おねがっ」

その光は少年の未来を貪るかのように少年の体を包み込み、ただただ不気味な光を灯して男たちを文字通り消していく。

「っ……いだから。キースを消さないでっ」

闇の中心に立ち尽くしていた少年も然り。世から存在は消えなかったものの、事途切れたかのように少女の目の前でどさっと崩れ落ちてしまった——。

序話：月明かり照る少年（後書き）

作者はシリアスよりもコミカルな方が好きです。いえ、断然好きです。

これだけは言っておきたくて……ですね。

この物語は決して暗い話ばかりでは無いという事をどうか理解してやってください。

第一話：妖精と思い出と（前書き）

読みに来てくれてありがとうございます。
最後まで読んでくれれば幸いです。

第一話：妖精と思い出

コツコツ、と。粗い小石が敷き詰められただけという簡素な地面の道を少年が一人、ゆったりとした歩調で地面と革靴の擦れる音をたて暗い夜道の中に溶け込んでいた。

『オルケイド通り』――、そう看板に記されていた四六時中喧噪の絶えない大通りから脇道に逸れて一時間くらいであるうか。幾度となく細い道が交差する中を躊躇いなく奥へ奥へと進んでいくと人気の無い静まり返った道に行きついていた。

ふと視線を左右に振り景色を確認すると、飾るように色取り取りの建物が自己主張強く道に沿って並べられていた大通りとは景色が一変。築数十年というような古びた木造、もしくは煉瓦造りの住宅が所狭というよう、窮屈そうに並べられており、色は薄汚れた灰色か茶色。全くとして飾り気の無いこの道は世界から切り離されたような孤独を思わす寂しい道だった。

「表よりも裏。国の本質はここにあり……、って感じが」

少年はふと歩みを止め、碧眼を空に向けポツリ、そう呟く。狭い家々の隙間から僅かに顔を覗かせている月明かりに照らされて、フードからこぼれ出ている癖の強い金髪がきらりと輝いた。

少年は一度溜息をついた後に煉瓦造りの壁に寄りかかり、全身をすっぽりと覆っている黒いマントの中から徐に片手を胸元に出す。そして片手には首から下げていたものなのだろうか、紐の付いた紅い宝石のようなものが握られており、それは月明かりを反射してではなく薄暗いものの、それ自体が輝いているようだった。

「キース？ どうしたの…… って、やっぱり反応しちゃったみたいね」

突如として少年の頭の辺りから女性の声がした。キース、そう呼ばれた少年はそれに驚きもせずじっと手元を見つめている。どうやら知り合いのようであった。

「よっこいしょ、と」

変な掛け声とともにキースの肩元で握り拳二つ分くらいの大きな光の球が突如として現れ、ポスンと音を立ててキースの肩に乗った。

「…… ああ、そうなんだミルシエ。特にこの時期にはいつもそうだ。『聖祭』の日が近づく度に『この目』も、『マナ』も反応しやがる」
「あの日からいつもそうなの？ キース。ほら五年前の……」

キースの肩元に現れた光の球は言い終わると同時に一層の輝きを見せ、暗闇に消えていった。

「恐らく五年前に受けたのがこれなんだろうが……、痛みと違和感を感じ始めたのは三年前くらいだ」

キースは少し眉を寄せ、思い出したくない事を無理やり頭の中から引き出してしまったように唇を噛みしめ顔をしかめた。

「でも仕方がなかったんでしょ？ あの子守るために禁忌を犯したんだから。私利私欲に溺れて『マナ』の禁忌に触れましたっ！ とかいうよりかはずっといういいもんでしょ」

消えたはずの光の元には掌くらいの小さな少女が一人、キースの肩元で足をぶらぶらさせながら当たり前のように腰を据えていた。キース自身、それに対しては何も咎めることはなく、さも当然のようには話を続けている。

「……まあな」

「？、どうしたのよ元氣ないじゃない。あつ、もしかして嫌な過去でも思い出させちゃったかな……」

小さな少女は肩元ですたと立ち上がりキースの横顔を覗き見る。その際、少女の足もとまで垂れているクリーム色の美しい髪がざらりと首を傾げたと同時に流れ、月明かりに照らされた。少女の顔も然り、仄かな明りに照らされて美しい容貌が露わになっていた。

キースは申し訳なさそうにこちらを覗き込んでいる少女を片目で捉え「いや、」と返す。そして、

「あの時から五年間の記憶なら確かにあるんだけど……、お前には言つて無かったがその前の記憶が少々曖昧なんだ。というよりは片鱗しか思い浮かばない……、言いかえればストーリーそのものが抜けた映像が、ただただ頭の中でごちゃごちゃと行き場なく溜まっている……そんな感じかなミルシエ」

キースは重たい会話をあまり好まないらしく、そこまで言つと驚いた表情で固まる小さな少女――、ミルシエの頭を指でつん、と突く。そして手をマントの中に戻しやや歩調を速め先を行った。

ミルシエは暫くの間心配そうな面持ちで肩元からキースの横顔を覗いていたが、これ以上聞くのも悪いわね。と、心の中で密かにそう呟き、再び視線を前方へと戻して歩みと同時に伝わる振動を心地よく思いながら暫くの間黙っていた。

「……」

キースはその沈黙をミルシェの配慮と受け取り、感謝した。別に話してはいけない内容では全く無いのだが、何分気持ち荒れてしまつ。ざわざわと『あの時』より前の記憶を無理やり思い返すと心にフィルターがかかつてしまったような、自分の記憶とは思えない何だか落ち着かない感覚に陥ってしまうのである。からして自分の過去を他人に話すのは嫌いなのではなく苦手なのであった。

「月が西に傾いてきたな」

時刻は何時ころなのであろうか、ふと見渡すと先ほどから殆ど変わらない風景が続いているのだが、夜闇をひたすら掻き分け思うまま進んで行くと大きな道に出してしまった。ミルシェも予想外であつたらしく小さな手を口元に当て、驚きの表情を作っていた。

「おい、ミルシェ。取り合えず隠れる。夜の連中はめんどくさい。姿を消す呪文が……つておい！」

ミルシェは「はい」答えるとあながち間違つてはいないのだが姿を隠すべく、キースの髪の毛を掻き分け首元のマントにすっぽりと入り込んでしまった。

確かに隠れるとは言ったが……、とキースは楽しそうに首元にしがみ付くミルシェを確認し、半ば呆れたような表情をする。

「あんまり動くなよ？ ばれると面倒だ」

わざと語調を荒くし少しは自らの行動を自嘲してくれ、と言葉の

中で密かにミルシェに訴え掛けていたのだが「わかったあ」と気の抜けたような明るい声。どうやら気付いてくれなかったらしい。拳句の果てには笑い声まで聞こえてきた。

「……ふう」

まあ見つからなければ何でも、とキースは諦めたように自らの肩に向けていた視線をふと辺りに向け、徐に周辺を見回した。

「……ん？」

何処かで見たことのある大きな道である。夜ということもあって地べたに座り込んで酒をがぶ飲みする者、取り合えずむしゃくしゃしているのか通行人に向け、何やら意味の分からない単語を並べ吐き出す者、そして外食帰りなのだろうか。場違いな家族連れが身を低くして足早に道を歩き去っていた。

どうも食べ物臭いがするなと思ったらこの道は朝昼は商店街となっていたのだろう。木の板で店口を閉ざした道に沿って並ぶ大小それぞれの建物を見てそう予想を立てた。……が、

「なんだ……、オルケイド通るか。昼間しかここに来たことがなかったから知らなかったけど存外荒れてるんだなこの国」

地面に落ちているぼろぼろの看板に『オルケイド通り』そう書いてあった。キースはそれを拾い何処に掛けてあったのか、と辺りを見回すがそれらしきところは無かったためにもう一度地面に戻す。そして、

「ぐるっと一回りしちゃったんだなあ……。気付かなかった。……」

ん？　ってなんだミルシェ、何がそんなに面白い」

自分の言った言葉にそんな面白いことなど含まれていなかった筈だが、とキースは気分を害したかのように眉を寄せ、笑い声の聞こえるマントの中へ小さく声を掛けた。

すると何がそんなに面白かったのか、しばらくマントの中で転げ回っていたのだろう。髪をあちこちに散らせ、神々しくもなんともない至って普通の白い無地のワンピースに皺を寄せたミルシェが人目を気にせずむくりと出てきた。キースは慌てて押し戻そうとするが「大丈夫よ」何の根拠をもってしてそんな事が言えるのかミルシェは偉そうにそう言い肩に座り込んでしまった。

「ふふふつ。キースの意外な欠点を発見しちゃったか〜ら〜ねつ。というよりも確証を得たというところかしらね」

ミルシェは足をぶらぶらと振りながら楽しげな表情で声を洩らす。「欠点？」とキースは訝し気な表情で言葉を繰り返した。

「だってあんなに道分かれてたのにここに帰ってきたなんて馬鹿加減も程々について感じよね」

「はあ？」

「キースって城内じゃ『完璧人』と思われているのよ？　知らなかっただろうけど。そんなキースが方向音痴だったなんてね、面白いじゃない」

方向音痴？とキースは言葉を漏らす。自身も思い当たる節があったらしく言い返そうとはしなかった。そのままミルシェは楽しげな声で、

「私と初めて会った時も道に迷ってたよね。私これでも妖精だから

木々と話が出来るの。『愚か者が一人、神聖なる森の中に彷徨ってきた』って木のおじいちゃんが怒ってたわつ。まああれがなかったら私たちは会えなかったんだろうけど……ね」

これが思い出というもののだろうか、キースはミルシエの言葉を聞いて思う。勿論ミルシエと会った時の記憶はあるのだが『あの時』以前の事は全く覚えていない。自分にもそんな楽しい記憶があったのだろうか……、肩元で楽しみに話すミルシエを見ながらふとそう思った。

「そうだな……俺は方向音痴なのかもしれないな」

「そうようよっ！ 絶対そうだって！ 今度帰ったら城内に広めちやおつと。大丈夫大丈夫、姿は見せずにそつと噂を広めるから……って、どうしたの暗い顔して。もしかしてふざけ過ぎちゃったかな？ ……キースは命の恩人なのにそんな風な言い方しちゃって」

「でも……でもねっ」、と楽しげな表情から一変させ、絶るよう必死な形相でミルシエはキースの髪を引っ張り言葉を紡いだ。しかしキースは「そんなことないさ。ミルシエ」呟き前を見据えた。

「そうなの……、かな。……でもごめんね？ もし私が嫌なこと言ったなら何度も謝るからっ。キースにまで嫌われちゃったら私……一人になっちゃう」

皺の寄ったワンピースをギュツと握りしめ、消えそうなくらい小さな声音でそう呟く。キース自身、全くそんな風にミルシエを思っていないかったのだが、この子の過去がこういう風にさせてしまうんだな、思いひよいとミルシエを摘み上げた。

「えっ？ きゃっ。ごめん……ごめんなさいっ」

「……ふう。俺は一度もお前を嫌ったことなんてないし……、ただ朝俺を起こすときに鼻と口を塞いで窒息死ぎりぎりまで追い込んだ時は別だ。あれはやり過ぎ。……っと、俺はお前のすることなすことほとんどは受け入れているつもりだが、ミルシエはどう思う？ おれが心底嫌がっていると思うか？」

そうであつて欲しいと言わんばかりにミルシエはキースの掌の上でぶんぶんと言を振る。

「……と、そう言うことだ。そもそも俺がお前を嫌っていたらお前に誘われてここまで……」

そこまで言うふとキースはあることに気が付いた。というのも今朝、朝早くからミルシエによつて散々な仕打ちに会い起されたわけなのだが、朝起きてからというものの「遠くに行こうっ」の一点張りだったのである。キース自身、ミルシエの我儘には慣れたものだったのだが今日は特に雰囲気違っていた。どこか必死さを感じたのである。

からしてキースは奥へ奥へと夜道を歩き、遠くへ来たわけなのだが、

「おいミルシエ……。どうして今日は遠くに行きたいなんて思ったんだ？ 『聖祭』が近日中に執り行われるんだから忙しかつたんだが、それはお前だつて知ってるだろう？ 何故だ？」

ミルシエは我儘ばかりを言うがそれは程々であり、絶対に我を通すというほど自分勝手な性格をしていない。むしろ人を和ませてくれるような優しい性格なのである。なので今日のミルシエの言動には多少の違和感が感じられた。

「そつ……それはね」

ミルシェはやや恥ずかしそうにワンピースを摘み、小さな顔をキースに向けてポツリ。消えうせそうな声音で言葉を紡ぎ始めた。

第一話：妖精と思い出と（後書き）

シリアスより作者はコミカルな方が好きです……。

設定が暗いためにやや話が重たいですが、場面が変わればきっと……

そう思い続けて書いています。

読んでいただきありがとうございます。

ではまた

第二話：咎を背負う少年（前書き）

連載は意外と厳しいものですね……。
今更のように思い知りました。
と、愚痴ってみます（笑）

第二話：咎を背負う少年

朝が訪れるのが早いことで有名なオルケイド通りは名実通り、太陽が地平線上に顔を覗かす頃には人々の往来が忙しくなされ、道に沿って建てられた店々の店頭では商品が所狭しに陳列されていて、開店にむけ準備がなされていた。

「んゝっはあ……、もう朝か。早いものだな時間が経つのは」

時折欠伸を混じらせつつキースは往来の中ゆったりとした歩調で歩みを刻み、店と店の間から僅かに窺がえた太陽を視野に入れ、そう呟く。どうやら眠気は襲ってきているものの、体には支障がないらしくゆつくりとはいえ、しっかりとした足取りで人ごみに紛れていた。

「おい……、ミルシエ。機嫌直せよ。腹がすいたろ？ 多分この調子じゃ朝食に間に合わない。体には正直でいたほうがいい。……これ食えよ」

人ごみの中でキースはミルシエへと小声で話しかける。開店の早いパン屋で購入したものだろうか、キースの両手には仄かな温かみを残し小麦の微香を漂わせるパンが持たれていた。それを自らの肩元に持つていき「ほら」と声をかける。

「……知らない」

「そんなに気にするなよ……。誰にだって勘違いはあるさ。その度こうして塞ぎこんでたらいくら時間があっても足りないだろうに……」

片方のパンに噛り付きながらキースは呆れたようにそう言う。すると突然周りの人々への配慮であろうか、直接キースの頭の中に大きな声――、ミルシェの怒った声がぐわんぐわんと鳴り響いた。

「ごめんなさいねーっ。どうせ私は世間知らずの妖精野郎ですよーっ！ 構わないでよっ。もう私、今日キースとは何も話さないんだから」

「……笑って悪かったからさ。機嫌直せよ」

話に集中して人とぶつからないよう注意しながらキース自身も魔力を使い、直接ミルシェへ言葉を投げかけた。しかし、どうやらミルシェはかなり怒っているらしく返事の代わりにマントの中でぽかぽかと叩いてくる。小さい掌によってであるものの存外、力が強かったらしくキースは痛みで顔をしかめていた。

「……痛いからやめてくれ。一日歩いて疲れてるんだ……、多少は俺への気遣いがあってもいいだろうに」

「それも私のせいであってこと？ 信じられないっ、私が折角心配して提案してあげたのに……。けど途中で勘違いだったって気付いたのに……。男だったら人の……、いいえっ、妖精の間違いくらい見て見ぬふりしなさいよっ。っもう」

直接キースの頭に言葉が流れ込んでくるために、ミルシェは周りに気付かれないだろう安心感からのものであるうか、小鳥の囀りよりも数十倍煩い金切り声でぐわんぐわんとキースの頭を揺らしていた。「ったく」参ったようにそう呟いたキースはミルシェから送られてくる言葉を魔力によって断ち切り、それと同時に残ったパンを一思いに口へ放り込み、深いため息をつく。

キースの目には朝早くから家族団欒、楽しげな表情で会話を弾ませ、隣を通り過ぎて行った三人家族がやけに輝かしく映るのであっ

た。

＊・＊・＊・＊・＊・＊

「だからな？」

オルケイド通りから細く伸びたやや暗めの脇道で、顔を背けへそを曲げたミルシェに対し、キースはやや語調を強めてそう言う。いつまで経っても叩くのを止めない、そして文句の尽きないミルシェに対してキースは痺れを切らし、たった今面と向って話をしているのである。

「別に俺の目とかマナは距離に関係なく『マナ』の原石、要するに『神聖石』があるなら絶対反応するんだよ。もし万が一、関係あったとしてもこのくらいの距離じゃ無理に決まってるんだ……。だからさっきミルシェの言った『遠くへ行けば痛みが癒える』っているのは無理があるんだよ」

「……」

完璧に無視を決め込む気であるのか、一向に視線を合わせようとしないミルシェにキースは内心呆れつつもそのまま話を続けた。

「それに一年に一度『神聖石』が魔力を失う『聖祭』の近日には必ずと言っていいほど反応するんだ。まあマナは神聖石の一部だから当たり前なんだけどな。目の方はマナに直接干渉した俺への罰みたいなもんだ……」

キースは言い終わると同時に空いている手の方を自らの右目にそっと当て「これがな」そっと呟く。すると『罰』という言葉に反応したのか、ミルシェは横目でちよっとキースの顔を盗み見た後、恰

もまだ怒っていますといった風に、

「……知ってるわよそんなこと。でももしかしたらって試しただけ。最近キースったら時々痛そうに顔を歪ませるんだもん。そりゃ心配にもなるわよ……」

顔を反らしたままぶっきらぼうにそう言う。しかし話している内に何かを思い出したらしくキースの掌で突然立ち上がり長い髪を振り乱して、

「それをキースはっ！ 馬鹿にしてっ、笑って拳句の果てにはお説教するんだもん。それは頭にくるわよっ」

突如怒りに燃えあがったよう、再び金切り声をあげてそう言った。自分の掌で怒りの大きさを体で表しているのか、ぶんぶん小さな拳を振るうミルシェにキースは視線を落とし、溜息をつく。

（……そんな表情に出てたのか。こいつの事だ、必死に考えての事だったんだろう。それを俺は）

心配してくれたミルシェに対し僅かではあるものの笑ってしまった自分を過去に戻って叱りつけたくなる。しかしそんな事は出来るはずもなくただ、自分の過ちとして心に溜まっていた。

けれどもミルシェが自分に対して抱く『心配』を、もしくは『不安』を軽くすることなら出来るかもしれない。そう思ったキースは目を瞑り魔力を体内で練り始めた。

（少しの間なら聖祭が近くであつても……）

黙りこくるキースにミルシェは多少なりとも違和感を感じたので

あろう。怒りと不安の混じった面持でキースを徐に見上げ「どうしたの？」声をかけた。……が、途端に表情は一変する。何か見てはいけないものを見てしまったようにミルシェはしゃがみ込み「ごめんなさいっ言いすぎたわ」キースに向けそう叫んだ。

「ったく……。俺がお前に魔術をかけるはずないだろうに……。信用ないんだ俺は」

怯えたように縮こまるミルシェに「こっちを向いてくれ」と優しく言い掛け、自らは魔力を練りつつこみ上げる痛みに耐えそしれぬ顔でミルシェを見やった。人の瞳とは思えないくらいに紅く、燃え上がるような瞳で――。

「お前も知ってる通り俺は魔力を練るところやって右目が紅くなる。さつき会話をやり取りした時のような微弱の魔力なら反応はしないんだが一定量を超えるとこれだ……。普段なら痛みは感じないし魔術もぶれることはないんだが、『聖祭』が近づくと魔力を使わずとも痛みは感じるし魔力を使えば尚更痛みは生じるんだ」

「……わかってるからそんな事つ。だから私がキースを連れて遠くへって考えたんじゃないっ。なのにこんな所で魔力を使って痛みを受けてるんじゃないわっ！」

キースの掌から首元に飛び移ったミルシェは「やめてよっ」懇願するように四方に散った金髪を思いつき引き、乞う。しかしキースは魔力を練ることはやめずに慌てふためくミルシェを宥めるかのような優しい口調で、

「けれど、そんなもんなんだ。痛みといってもそんな大それた程の事じゃないし、ほら、現に今俺だってそんなに痛そうにしてないだろうに……。ったく、心配しすぎなんだよミルシェは」

そこまで言ってキースはふと魔力を練るのを止める。ミルシェにはあまり痛みを感じない、そう言ったものの、本来感じる痛みはそれほど甘いものなどではなく、体の内側から炎で焼き尽くされるような酷い痛みが体中を侵食していくのである。これ以上魔力を練り続けたらミルシェにはばれてしまう。それでは本末転倒じゃないか。そう判断したキースはやや短い間だけであつたものの魔力を練るのを諦め、ミルシェの呼び掛けに応じ止めたのであつた。

「ほらな？ そんなに痛くなさそうだろう。意外と感ぜないものなんだ……意外と。恐らく三年もやってきたもんで慣れてきたんだろうよ。最近では」

「そう……なんだ。じゃあ心配はないんだね？」

「当たり前だ。なんならもう一度やって見せてもいいんだが」

再び魔力を練るように目を閉じたキースに「わかったから大丈夫！ 安心したっ」ミルシェは慌ててそれを断わり「良かったね」そう呟いた。

キースはその慌てっぷりにやや不信感をいだいたもののミルシェが「本当に良かったわっ」と、満面の笑みでこちらを見つめ言い寄ってくるので内心ホッとした。バレていないのだと。

「……まあなんだ？ 俺の事についてはいろいろと他にも問題はあるけど、大したことはない。殆ど自分で解決できるし、もしできなかったらお前に頼むからさ、心配すんな？」

「……うん。わかった」

「……？ まあそういうことなんだ。今更になつての確認だがこういうことは重要だと思つてな、言つてみただけだ。ほら、用が終わつたし城に帰るとするか」

言い終わると同時にキースは「行くぞ」と言い残し、細い道の奥へと進んでいく。ミルシェも後に続き行こうとするも、

「……『完璧人間』てのは所詮噂ね。嘘をつくときキースったら饒舌になるんだもん。全く、世話の焼ける……」

呟くと「そっちは城の方じゃないわっ」どんどん奥へ奥へと進むキースにそう叫び、大きいため息をついた。

第二話：咎を背負う少年（後書き）

また説明ばかり……、僕も早く本編にキースを放り込みたいんですけどそれでは物語にはならなくて……。

やつのことで『城』に戻ります。あえて国名とかは出しませんが次で分かると思います。

要するに今まではプロローグとしてみていただいてもよいかなと（長すぎですが……）

次回から次第に物語は動いていきますので是非、暇なときにも目を通していただけたらなと思います。ではっ

第三話：帰還

（前書き）

一日更新がお遅れてしまいました……。

今回は少々手間取りました。

五年という月日がどのようにに人格、を変えるのか。

そして与えられた身分がどのようににその人の人格を変えるのか。

人の本質は変わらないでしょうが表面上は変わってしまうので……。

それを今回は頭に入れつつ書き上げました。（と、どうでもいいことを書いてみます）

第三話：帰還

白一色で統一された人気の無い、寂しさだけを思わす広く大きな部屋の中に、やや大人びた面立ちをしている少女が一人。

礼服なのであろうか、頭から足元に掛けて素材は純白の絹である。色取り取りのステンドグラスから差し込む光をうつすらと通すベールのようなものを被っており、少女の華奢な身を包む純白の着物もベールと同じ素材のものである。少女の白い肌がうつすらと生地を通して透けており、やや寒々しさを感じさせる礼服ではあるものの、どこか神々しくそして気品溢れる身形をした少女がそこにあった。

少女はゆつたりとした足取りで部屋の奥に設けられた祭壇のような所に歩み近づくと、仰々しく膝をつき重々しく頭を垂れた。

「悠久たる時を超え——、母なる大地に根を下ろさん我ら小さき民の元に——、永遠なる幸福と、行く末光差し込まん希望を与えし神の涙——マナ石よ」

ゆつたりとした口調で、少女は言葉一つ一つに思いを込め重々しく祭壇に向けそう言い掛ける。静かなこの部屋にその少女の声だけが大きく鳴り響き、幾度となく反響していた。

「汝統べし栄えある王国——マイアールの背負いし民の痛み、苦しみ、そして憎しみを神のご加護によって和らげんことを。そして歴史深きマイアールがこれより永遠に滅ばんことを神に誓ってマナ石に願わん。マイアール王国第十六王女、レフィカ・スリフィナル・マイアールが神の御許にて肅々と平和を願わんことをこの場にて誓おう。ファールリス」

自らを王女と名乗った少女――、レフィカは重々しくそう述べた後にやや静寂の間を置いて徐に立ち上がった。そして立ち上がったと同時にふんわりとしたスカートの裾を白く細い指で少々摘み、もう一度ゆっくり頭を垂れた。

「私の大切な人にも……どうか神のご加護を。そして光の手を差し伸べ、元の姿に戻さんことを」

スカートの裾から放した両手を淡く膨らんだ胸元まで持っていく、心から願うよう小さくそう呟いた。

『ガゴン』

暫らくしてレフィカが次の礼拝の儀を執り行おうと祭壇に掲げられた『マナ』に触れ、何やら呟き始めたと同時に背後でドアの開く音がした。

（礼拝中にはこの部屋への立ち入りを禁じているというのに……）

神聖な時を汚すのは誰ですか？ と、理解に苦しむようやや困惑の混じった表情を、レフィカは顔を覆うベール内で瞬時につくり、「全く衛兵は何をしているんでしょう」と呆れたように呟いて徐に侵入してきた人へと視線を投げかけた。

「拝礼の儀の最中、大変申し訳ないのですがお伝えすべき事柄があります……」

開けたドアの前で不慣れな動作で膝き頭を垂れた兵士が、ガシャ

ンと鎧の擦れる金属音を部屋中に響かせた後、申し訳なさそうな口ぶりで伝令をした。

「どのような内容なのでしょう。……、私の知る限りでは拝礼よりも重要な事柄など頭に浮かばないのですが」

拝礼を途中で中断させられたために幾分不機嫌であることが、レフィカの発する優しい口調からも僅かに窺うことができた。それを直接感じ取った兵士が跪きながら体をぶるつと震わせる。どうやら並々ならぬ緊張感を抱いているらしく、がたがたと地面につく手が小刻みに震えていた。

「し、しかし……、以前王女の仰せになったことでして……伝えないわけにはいかず、はい。ええつと……」

「はつきりと言ってください」

ぴしゃりとレフィカは兵士に向けそう言う。兵士は「はっ、はい」と、裏返った声音で返事をそう返し、続けて、

「城壁の物見役より、昨日の早朝より姿の見えなかった『魔兵士部隊秘隊長』、キース殿を城の門にてお姿を確認いたしました。それはやはり、王女にお伝えするべきだと騎士隊長殿が……」

不安げな口調でそう言うと、兵士は機嫌を伺うよう上目使いでレフィカの表情を見やった。少し身分の上の者であるなら許される行為ではあるが、相手が一国の王女ともなれば話は別である。礼拝を中断させた拳句、礼服に身を包んだ王女の顔を覗き込むなどという行為は厳罰が下ってもおかしくはなく、処されるべき行為なのである。震える兵士はそれを今更のように思い出し、ぶわっと噴き出る汗を冷たく感じつつも即座に視線を地面へと落とし、小刻みに震え

あがった。

……が、しかし、

「それは本当なのですか？ キース、いえ、キース隊長が御帰還なさったということはっ」

今までの不機嫌を感じさせる口ぶりからは一変。どことなく嬉しそうな口ぶりで確認するようレフィカは兵士に向け「本当なんですねっ」と、繰り返し尋ねた。そんな明るい返答は予想だにしていなかった兵士は頭上に「？」を掲げるも、

「……はい確かに。物見役の者が言っていたので確かかと」

地面に向ける顔を不思議色に染めつつも、兵士はしっかりとそう答えた。

「そうですね……。それは良かったです」

レフィカは僅かに頬を赤く染めて、

「……では迎えに行かなければなりませんね。予想では大変疲れていると思いますもの。私が直接行って飲み物を差し上げてきますわっ」

浮かれたようにそう述べるとレフィカは兵士に「お控願える？」優しく言いかけて退出を願う。兵士はレフィカの示す態度の豹変に僅か戸惑いつつも、「では、失礼します」ドアの前でもう一度深々と頭を下げ、言われた通り部屋から立ち去っていった。

「……キースつたら何をやっていたんでしょう。飲み物を渡す前に聞いてみなければなりませんね」

残された部屋で一人、嬉しそうな表情でそう呟くレフィカは、

「何のドレスで行きましょうか……」

頬に指を当て「やっぱり白かしら」と呟いた後、すたすたと自らも部屋を後にした。

＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・

マイアール王国には城というものがない。理由は簡単明白であり、五年前の戦争で殆どの城が崩壊、もしくは半壊してしまいマイアールの本城であるクレセツド城しか戦争の後に残らなかったのである。

とはいうもののクレセツド城自体も戦争の影響を受けて城内の壁が崩れる、西の塔が倒れたなどとは半壊状態だったのだが、『代々国王が住まう由緒正しき城』という扱いの元、多くの人員を動員しておよそ丸一年の月日をかけてほぼ元通りに修繕したのである。

「よくここまで建て直したもんだな……。元の姿を知らないとはいえ、いつも驚くよ。この城には」

戦後事情を殆ど知っているキースは高々と設けられた城門をくぐり抜ける際、目前に堂々と据える城を仰ぎ見て感嘆の意を述べる。

「それに城下町だって、焼け野原だったじゃないか。それなのにこんなにも元通りになって……凄いものだ」

「……ふうあゝつ、と。……ん？ どうしちゃったのよキース。そんな遠くを見るような目をしちゃって。何か思い出したの？」

一睡もしていないためであろうか、ミルシエはキースの肩元で大きく伸びをして欠伸を欠く。どうやらミルシエの目には背後に広がる城下町に向け、目をやるキースがどこことなく不自然に感じられたらしく怪訝な面持で「どうしたのよ」と、再び尋ねた。

「いや……、なんでもない。ただこの国は強いな、と改めて思っただけだ」

「そうなの？ それだけ？ 何か隠してない？」

「何も……だ」

「ふうあゝつ。……それならいいんだけどね。なんかちょっとキースの様子がおかしく見えたから聞いてみただけ」

ミルシエは話をしている内に眠気が襲ってきたらしく、目をこしこしと擦りながら、

「私眠いからちよつと寝るね……、何かあつたら私に言つてよね？ 私はキースの味方なんだから」

欠伸交じりにそう言い、「おやすみ」と、小さな手を振りながらもぞもぞとキースのマントの中へと潜り込んでしまった。それに對しキースは「ん、」と小さく返しそのまま城内へと足を向ける。

（ザフィールを退けた東の国も……何れはこの地を、かもな。）

「平和つてもんは……」マントの中で眠るミルシエに聞こえない程度の小さな声でキースはそう呟いた。

城門から続く道を真っ直ぐに突き進むと、ぱあっと視界が開けた。そこには隅々まで手入れの行き届いた庭園が広がっており、季節を彩る花々が色ごとに分けられていて綺麗に咲き誇っていた。

「聖祭も近いことだし、な。疎かにならないよう、より一層手入れに力を入れて欲しいもんだな」

マントに手をすっぽりと収め、ゆったりとした歩みを刻みながら小さくそう呟く。すると突然、

「気が抜けているのは誰なんでしょうね？ キース副隊長……いえ、この場ではキース隊長でよかったですね」

「……っ！」

あたかも待ち受けていたかのよう、キースが呟いたと同時にごくそっと太い木の蔭から人影が現れた。その仕打ちには流石にキースも驚いてしまったらしく「!?」と体をビクつかせ固まってしまう。ミルシエもその反動で起きてしまったらしく「もう少しだけ」と、寝ぼけた様な甘い声を上げていた。

「突然いなくなつて突然帰つて来たりと……。ゆったり旅行気分ですかつ、キース隊長」

ゆったりとした足取りでキースの前に姿を現し、

「……隊長としての自覚の面も含めですが、少々相談があるのです。他国との情勢とでもいいましょうか、それらをしばしの間、じっくりとです」

道を塞ぐように立ち憚って、怒りを過ぎた様な口調でキースに向けてゆっくりと言葉を紡いだ。キースは驚きの表情を暫らくしていたものの、やがてそれはめんどくさいものを見るかのような顔つきに変わっていき、遂には脱力して溜息をついていた。

「……」

「無言を了承と受け取ってもよろしいでしょうか」

「……ったく」

「いいのでしょうか？ キース隊長」

「……」

「わかりました。ではこちらへ。じっくりと話そうじゃありませんか。キース隊長」

全身を煌めく鎧で固めたその女性は、しつとりと長く伸びた癖の無い金髪を無造作に掻き上げると「早くっ」怒鳴るように棒立ちするキースを促し、地面に八つ当たりするようにどこかどかと庭の奥へと進んでいった。

「……平和か」

「完全に起きちゃったよ……私」

二人は同時に「はぁ」と、深い溜息をつく。「しかたがない」キースは諦めたようにそう呟き、逃げるようにして空を飛び立ったミルシェの足を捕まえ共に先を行く女性の元へ走っていった。

第三話：帰還

（後書き）

読んでいただきありがとうございます。今回は二人の新たなキャラ（？）が少々出てきましたが……。

もし楽しんでくれたのであれば幸いです。

今回は至って平和を思わすような内容でしたが……今後の事を考えればこんなのもありかなと思ひまして（笑）

とまあ前書き後書き共々長くなってしまいましたが、ここまで読んでくれた人。本当にありがとうございますっ！もしよければこの物語の続きも読んでやってください。（欲を言えば感想とかも欲しいなんて思ったりもします（笑））ではっ

第四話：東の国（前書き）

今回の話は自分としては重要な話だけあってかなり上手くいった感じです。最後まで読んでくれれば嬉しいですよ。

第四話：東の国

庭師が丹精込めて育てたのであろう季節ごとに様々な色彩を演じる花々は、気持ち良さそうにどこからか流れてくる清かな風に揺られていて、やや甘い匂いを風に滲ませていた。クレッセツド城の敷地内に設けられた庭園を南北に一本。城門から城内へと伸び、庭園を両断する開けた道には最早、美の造形物と称されてもおかしくないほどに整えられた植木が一定間隔に立ち並んでいた。

そんな完成された美を思わす風景の中に、どうしても紛れ込めないでいる女性が一人。行き場の無い怒りを拳に溜めて颯爽と歩みを刻み、歩く度に身に纏う煌びやかな鎧をがしやがしやとならしているがために、長閑であつた庭園を瞬時に緊張感漂わせる場所へと豹変させていた。

「……なんなのですかあの態度はっ！ 人の上に立つ者としての自覚が足りないのっでしようかつ」

嘆く様にその女性は頭を抱え、誰に向けてでもなくそう言い放つ。どうやら目的は城内にあるらしく、ぶつぶつと文句を漏らしながらも、あくまで足は止めずに城内へと続くこの道を足早に歩き去っていった。

その調子で城内へと続くこの道を暫くの間、足早に歩いていたものの「あゝっ！」と、腰まで垂れた金髪を掻き上げて急停止した。それと同時に今までなんとか保たれていたその女性の美貌が一気に豹変する。元々やや吊り目であつた碧眼がさらに吊りあがり、整った唇を噛み締め眉をこれでもかというほどに寄せていた。折角の美

貌が台無しだ、と言い掛けるのでさえ憚られるほどにその女性は周囲に怒りを振り撒いていた。

そこへ黒いマントで体をすっぽりと覆った少年——キースと「私は関係ないじゃんっ!」と、キースによって掴まれた足を解放するためにガシガシと手を蹴り上げているミルシェらが共々息を切らし、怒りの限界を迎えた女性の元へと少々間を置いて駆け寄ってきた。

「……ったく。そんなに早く歩かなくてもいいだろうが。こっちはミルシェに一日中付き合わされて寝不足なんだ。少しの運動とはいえ、睡眠のとっていない体には多少なりとも堪えるぞ……フィリア」

キースは風を体に通そうと肩から足元に掛けてほぼ全身覆っているマントを片手でパツと払い、呆れたようにそう言う。ミルシェはというとキースの放った言葉に対して並々ならぬ憤りを感じたらしく「キィーっ!」と、金切り声を上げ、より一層力を込めて自分の足を掴むキースの手を蹴り上げていた。

「キース隊長っ!」

痛いから止めろ、止めないもんっ、などと、キースとミルシェ二人の間で行われている些細な喧嘩に、その女性——フィリアは「自分はこちらにいますぞっ」と、声を荒げて参入してきた。

が、しかしその眠気によってのものなのであろうか。くだらないやり取りを交わすその二人は、未だフィリアの接近に気が付いていないらしく、拳句の果てにはキースがミルシェを黙らすために魔術を使おうとするなど、更なる発展を見せていた。そのため、フィリアは怒りの限界をさらに上げたらしく「……キ、キ、キっ」と、何やら恐ろしげな声を漏らし、ふるふると小刻みに体を震わせて、

「キース隊長っ！ 聞こえていますかっ！ 部下の話であろうとっ、話はっ、目を見てっ、聞くべきだと私は思いますがっ。隊長はいかにそれを捉えますかっ」

と、拳を振り上げて叫ぶようにキース目掛けて言葉を発した。小さな妖精と乱闘を繰り返していたキースは「なっなんだ」と、フィリアの行動にやや驚ろかされたらしく一旦ミルシェとのやり取りを止め、小刻みに震えるフィリアの方へと素早く視線を投げかけた。

「よもやとは思いますが……、念のため聞いておきます。私が城内で必死に悩んでいる間、キース隊長はそのちびっ子を連れて遊びに行っていたのではないでしょうか」

「……どう思考を繰り返したらそうなるんだ？ 俺はただ」

ミルシェに連れられて城外に行っただけだ。と、キースが続けようとしたところで、先ほどの仕返しといわんばかりに、

「遊びに行っていましたっ！ キースと私でっ」

こみ上げる笑いを押さえつつ、ミルシェはウィンク交じりにそうキースの言葉に被せた。キースは瞬時驚いた顔をするも、そのテンションには付き合いきれないと言わんばかりに深い溜息をつく。事の発端を起こしたフィリア自身も「大分察しがつきました」と、疲れ切った表情で立ったまま脱力するキースを見て何かを感じ取ったかのようにそう呟いた。

「……で、なんなんだ？ 相談っていうのは。よもや笑い話ではあるまい」

キースはミルシェとの争いによって皺の付いたマントをぱつと払い、やや真面目な表情をつくってそう問いかける。キースの肩元でつまんなそうに頬を張るミルシェに対しては「しばしの間、静かに頼む」と、視線を送らずにそう言い掛けていた。

「そのことに関してなのですが……」

やっと真面目な話を振られたフィリアは辺りを見回しながらやや困惑しているような面持ちでそう言い、

「少々この場では相応しくない内容ですので、場所を改めてということでしょうか？」

キースの耳元で他に聞かれぬよう、小さく囁きかけた。キースはしばらく顎に手を当てて、その内容について思い当たる節を考え込むような仕草をしていたが、やがて思いついたように、

「東の国の事……、か？」

それなら納得がいく。と、キースは眉をよせながら予想を述べた。フィリアはやや驚いた様子でキースの予想を耳に通すも、「……おそらく」と、再びキースの耳元でさらっと囁いた。

「おそらく……、というのはどういうことなんだ？」

やや押しの弱いフィリアの肯定にキースは疑問を露わにする。フィリアはまたしても困った面持ちで辺りを見回し、

「それを含めてのご相談なのです。ここで詳細を述べるのは容易いことなのですが……、やはり憚られるかと。なので場所を移してか

ら後、詳しくお話するという事でよろしいでしょうか」

声を殺してフィリアはそう頼む。キース自身、本当はこの暖かな陽気の中で話を進めたいところであつたが、

（人払いの魔術を掛けるにも魔力を練らなければならないしな……。
）

と、呆れたように自らの瞳に手を押しやりながらそう思う。それをじつと眺めるフィリアもキースの身の上を知った上での提案であつたらしく「私は魔術を使えませんので」と、申し訳なさそうに言葉漏らしていた。

「まあいい。俺の部屋を使うとしようか」

キースはふらふらと頭上で手を振りながらそう言う。フィリアも「わかりました」と、素早く答え、既に城内へと足を向けているキースの後を追つて自らも城内へと歩き出した。

「私はただの邪魔者なのっ？ 私を置いてっちゃやなんだから……。ねえ私忘れられちゃったの？」

一人だけ会話に混ざれず、暇つぶしに空を飛んでいたミルシエはご機嫌斜めといった面持ちでそうぼやき、先に行くキースの頭目掛けて全速力で飛んでいく。

キースの悲痛の叫びが庭園内に響き渡るのはその直後のことだつた――。

＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊

東の国——そう呼ばれる国とキース達の据えるマイアール王国が交わったのは約三年半前の事。計画通り南下政策を成功させたザフィール帝国はマイアールを含め、ほぼ大陸全土を手中に収めていて、各国の国旗は全てザフィールのもの。そして各国特有の文化、風習などは強行的に介入されていて、ほぼ大陸全土がザフィール一色に統一しかけている頃の出来事であった。

『大陸全土に渡る独裁政治』というスローガンを元にザフィール帝国は大陸全土を治めた後も湧き出てくる反乱分子を制圧するために幾度となく出兵を余儀なくさせられていた。しかし、何度も国から出兵させていたのでは限が無くなってきたので、ザフィールは監視役としての兵士を国から地方へと分担させる政策を企て始めた。それでは主要都市を守る防壁が薄くなってしまうのだが、これを破るほどの兵を蓄えた集団など最早皆無と捉えたザフィール帝国は躊躇う事無くその政策を許可し推し進めていったのであった。

——しかしその政策はその後、ザフィール帝国崩壊の原因となってしまうのである。

というのもザフィールがその政策を実行しはじめてから数ヶ月後、やっとその政策が定着してきた頃にザフィールの描き上げた未来予想図を横から破り裂くように『東の国』が広がる海を渡り、兵を率いてザフィールの治める大陸へと攻め入ってきたのである。

結果は無論、ザフィールの惨敗で幕を閉じた。大陸全土に兵をばら撒いたザフィールの兵力には最早一点突破を図る『東の国』の侵略を止める術など無く、数日間という僅かな時間によって首都を落とされ、順繰りに主要都市を落とされてしまい、拍車がかかったように侵略されてしまった。

更にはザフィールが負ける。そう読んだ人々が意外なところから流れてきた波に乗り遅れまいと混乱に乗じて大陸のあちこちで反乱を起こし始めたのである。

その両方を抑える武力を兼ね備えていないザフィールは最早その波に逆らう事無く、のみ込まれていつてしまったのであった。

「そして何故か侵略が終わると同時に『東の国』はそのまま大陸から撤退。どうやら『マナ』をかき集めてたみたいだがそれくらいだろう。解放された国々はまた再び国旗を掲げて国を立ち上げたし、この国も例外じゃない。血を吐く思いで再び元の国に建て直したんだが……」

と、言いながら自室に設けられたベッドに腰を据えて、

「その矢先にまた再び『東の国』が……、か。何故今更というのが論点なんだろうな」

溜息交じりにそう呟いた。キースが腰を据えるこの広い空間は至ってシンプルであり、日常を過ごすにあたって必要最低限の家具しかとり揃えられて無く、やや殺風景さを感じられるものの小奇麗にそれらが並べられていてキースの性格を映し出したような部屋であった。

それをややそわそわとした感じで見回すフィリアも然りであって「そこなんですよ」と、同じ疑問をこぼしていた。

「その『東の国』なんだが、俺がいない間に一体何を。まさかこの大陸に兵を向けてきたか？ そんな情報は諜報部からは一切入っていないんだが……」

「いえいえ、そんな事ではありませんよ。まだ実態を掴み切れていませんが」

フィリアはそこで一旦言葉を切ると、何やらごくそと身に纏う鎧の中を漁り始めた。

「昨夜、丁度キース隊長が城内にいらっしやらなかった時ですね。その頃に城の裏にある森を巡回していた者達がいまして……、ありましたっ！」

フィリアは鎧の中から紙を取り出して「この者達です」と、三人の兵士の顔写真を見せた。そして、

「森の中央部……城から約二キロほど離れた場所でしょうか。何やら不可解な紋章を見かけたと申しまして」

「紋章というと、それは魔方陣の類か？」

「はい」

フィリアはまたしても鎧の中をがさごと漁って「これです」とキースの手元に紋章の写真を見せる。夜中に撮ったものである為か、やや暗く写真は写っていたがキースは目を凝らしてそれを見やり「これはっ！」っと、驚きの表情を見せていた。「そうなんです」と、フィリアは頷きながらそれを肯定し、

「これを詳しく検証したところ移転式の魔方陣であることが判明したんです。……大分魔術に詳しい者たちを集めるのには苦労したんですが。まあキース隊長は一目でわかってしまったようですね」

険しい表情は変えないままフィカはキースより写真を受け取りながらそう言う。キースは「しかし、」と、納得がいかない様子で、

「何故これが『東の国』の者によるものだと？ 魔方陣を描いた術

者でないと移転先は分からないはずなんだが……。まさか、あくまでこれは予想の範疇なのか？ それならこれは早とちりというものであって」

「それは違います。まだ確定とは断言しませんが十中八九『東の国』によるものです。再度すみませんがしばしお待ちを」

キースの言葉に被せてそう言うといふフィリアはめんどくさくなったのか鎧の中を漁るのを止め、体と鎧をつなぎ止める金具を外して、ストン。脱いでしまった。それを視界に入れたキースはやや驚いたものの、鎧の下にはちゃんと服を着ていたようである。フィリアの素肌が露わになるような事は無く、キースは複雑な心境になりつつもほっと一息つく。そんな様子を見兼ねたミルシェは思いつきキースの頭を蹴飛ばしていた。

「？、まあこれがその写真です。同僚に撮らせるのも酷かと思いましたが……何分一刻を争っていたものでして」

フィリアは悔やむようにそう言い、「もう既にその者たちは埋葬されていますのでご心配無く」と、キースの手元の写真を見つめながらそう付け加えた。

「これは酷いな。この傷は恐らく魔術によるものだが……」

二人の見つめる先の写真には二人の兵士が血を流して息絶えていた。ゴクン、とキースは生唾を飲み込む。しかし、フィリアは、

「こちらもそうなのですが……、この隅に写っている『モノ』をご確認ください。初めは私もこの事を『東の国』によるものとは思わなかったのですが、これを目にしてはそう予想を立てる他なく……」

写真の右隅を「ここです」と、指をさしてキースの視線をそちらに引きつける。それによって視線を写真の右隅にやったキースは、
「なるほど……、な」

半ば信じられないような面持でそう呟き「本当に来るとは」と、小さく言って徐にベッドから立ち上がった。

第四話：東の国（後書き）

と、なんだか物語の動きを感じさせる展開になってきましたが……
どうだったでしょうか？

次回が楽しみと感じたのなら幸いです。
ではまたです。

しかし、レフィカはまだキースに会えませんね〜（笑）
聖祭とかもあるし……意外とネタが尽きません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3595f/>

空から落ちた紅き月

2010年10月10日06時05分発行